

World Travel

Poland
Germany
Netherlands

2017.3.24～4.1

岡山赤十字看護専門学校
2年生 AO

I : Poland



先日、学校の春休みを利用して
ポーランド、ドイツ、オランダへ行ってきました。
今回は旅のメインであったポーランドに絞って
書かせて頂こうと思います。

どこかへ行ってくると人に話すとよく理由を求められる。

私の場合、基本的に「行き先」よりも「行く」事が先行している。

ポーランドを選択した理由は
幼少期にアンネ・フランクの伝記で知った、
アウシュビッツ強制収容所を自分の目で見るとだ。

昨年夏にインドに行った際はマザー・テレサの施設での
ボランティアがメインであった為、看護とも結びつきやすかった。

しかし今回の強制収容所は看護とは一見繋がりにくいとも言える。

昨年訪れたインドへの旅の帰国後は
正直、しばらくの間様々な感情が入り乱れ、
行って結局自分は何を得たのかと整理、表現する事に苦勞した。

しかし、少なくとも無数の点は得ていて、
時間の経過や日々の生活からだんだんと点が結び付き、
線となってゆく感覚があった。

今回の旅も、行って何を得的か、
そこから自分がどう捉えるかは分からないが、
何かを得てそれが必ずリンクし、結び付く確信はあった。

いつしかこの様に結びつけたり
運命づけて考える事が癖になっていたが、
そうする事で身に起こる様々な出来事に
意味がある様に思えてくるし、新たなひらめきも多い。

Ⅱ: Departure

日本から空路で約15時間。
フランクフルトを経由し、
ポーランドの首都：ワルシャワへ到着した。

さらに鉄道やバスを乗り継ぎポーランド国内を南下。
クラクフを経由したのち、南部のオウシフィエンチム市に入った。

「アウシュビッツ」

という言葉は非常に有名だが、これはドイツ名。
「オウシフィエンチム」とポーランドでは読む。

クラクフ中央駅からオウフィエンチム行きのシャトルバスに乗車。
バスの乗客はほぼヨーロッパ系の方で、
アジア系の方は私の他に2人のみ。

1人で旅をする時は、移動時間は寝ているか、
車窓を眺めながらぼーっとしている事が多いが、
この日に限っては知らず知らずのうちに
緊張感があったのか移動中も眠れずソワソワして過ごした。

途中数カ所停車しながら1時間半ほどで
アウシュビッツ強制収容所博物館へ到着した。
「ついに来てしまった…」という感覚。

The photograph captures a somber scene at the Auschwitz concentration camp. In the background, a massive, multi-story brick building with several small, barred windows stands under a clear sky. In the foreground, a black metal gate with a wooden door is partially open, leading into a courtyard. To the left of the gate, a large informational sign is visible, featuring text in Polish, English, and Hebrew. The ground is paved with light-colored stones, and the overall atmosphere is one of historical gravity.

博物館内で日本語のガイドブックを購入。
荷物を預け、人でごった返した中、
入り口をグルグル探し回った。

周りを見てもやはりここもヨーロッパ系の観光客ばかりで、
学生の団体も多数見かけた。
なんとなく、悲しい様な、違和感の様な。

もちろん距離的な問題や、
平日の午前中という事もあるのは分かるが、
国際的な関心の差がある様に感じた。
実際に、他の先進国と比較しても
日本人の来場者数は少ないそうだ。

入場チケット売り場でチケットを購入。
購入といってもガイドをつけない限り無料で入場できる。
しかし9割方、皆、個人や団体にガイドを付けるようで、
フリーで見て回る観光客はほとんどいなかった。

説明もしっかり聞きたかったが、
イヤホン越しに解説を聞きながら場内を回るというよりも、
自分1人でその場の空気を感じたいと思い、
今回は1人で回ることにした。

ちなみに、日本人は唯一1人だけ、厳しい試験をクリアして
現地でガイドをされている方もいらっしゃる。



入り口に掲げられたこの言葉。
意味は「労働は自由を作る」である。

だが、よく見ると「B」の文字に
違和感があるのが分かる。
これをつくらされた者の
せめての反抗心が由来だそうだ。

内部は、収容所がそのまま保存され
収容所全体が博物館になっていた。
レンガ造りの同じデザインの小屋が規則正しく並び
その周囲を今なお有刺鉄線が取り囲んでおり
地面は石がごろごろ転がっている。

それ以外は何もなく、
悔しいほど静かで殺風景な風景だった。
その割に嫌みの様に天気が良く、虚しさを覚える景色だった。

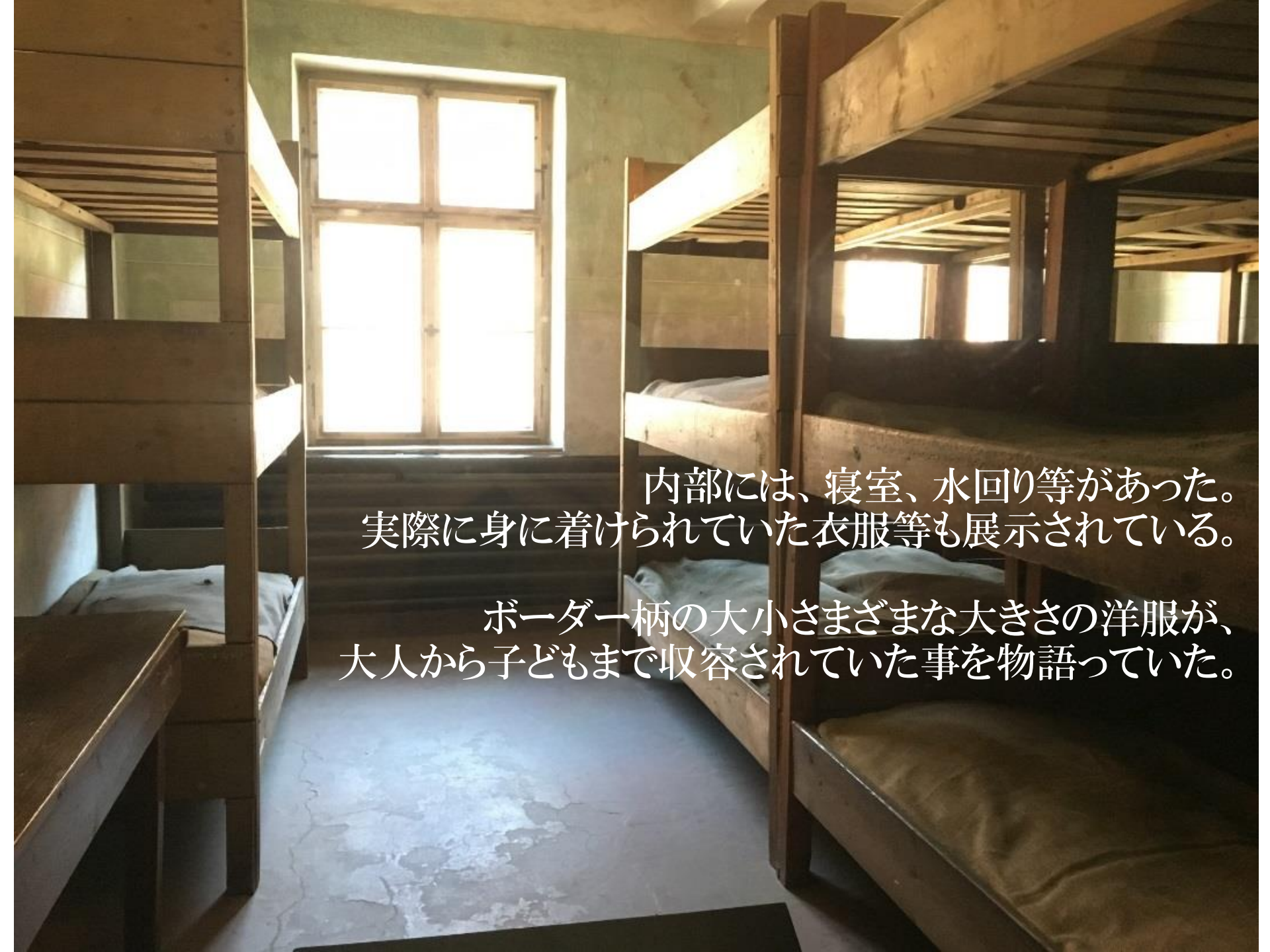
それぞれの小屋には「BLOCK〇〇」と番号が付けられてあった。



全てではないが、いくつかが博物館として開放されており、
我々観光客はその内部を見させてもらえる様、
順路も整備されていた。



IV: BLOCK11

A photograph of a historical wooden dormitory interior. The room features rows of wooden bunk beds on both sides, with some beds having white linens. A large, multi-paned window in the center background allows bright light into the room. The walls are a light greenish-grey, and the floor is a mottled grey. The text is overlaid on the right side of the image.

内部には、寝室、水回り等があった。
実際に身に着けられていた衣服等も展示されている。

ボーダー柄の大小さまざまな大きさの洋服が、
大人から子どもまで収容されていた事を物語っていた。

BLOCKの内部は中央に廊下があり、
その両サイドに部屋が何室かある構造だった。

廊下の壁一面には坊主頭にされた方たちの
顔写真が一面に張られてあった。

管理の為だったのだろうが、
こうして今なお残っている事に不思議な感覚がした。

引き止められているような気がして、
なかなかその空間から足を動かすことができず、
1人1人の顔をじっくりと見た。

急いで次から次へと写真を撮られたのだろうか、
ほとんどの方が、フラッシュに驚いた様に
目を見開いた表情をしていた。

しかし中には、どこか悲しげな表情の方、
何が起きているのかわからず不思議そうな顔をしている方、
また、何故かうっすらと笑みを浮かべている方もいた。

皆、どんな思いでカメラと向き合ったのだろう…。
そう思うと自然と涙がこぼれていた。
乱雑に髪を切られた女性の写真、
小さなまだあどけない子供の写真もあった。

特に子どもの展示の場所では本当に、耐えられなかった。

当てはまる言葉が見当たらない位に骨と皮だけに痩せ細り、
肋骨もむき出しの下着1枚、皆そんな姿だった。

今でも鮮明に彼らの顔が脳裏に浮かぶ。


敷地内のあちらこちらには
鮮やかな花やキャンドルが
手向けられている。

綺麗に晴れた空の下
その鮮やかさが一層際立ち
敷地内の何とも言えぬ
空気感とのギャップに胸が苦しかった。






V:ガス室・焼却炉



最後に、ガス室と焼却炉を見た。
当時「シャワー室」と呼ばれていた。
入る瞬間の一步の重さが鮮明に記憶に残っている。
体が重い。
呼吸も苦しい。
胸が押しつぶされそうだった。



ガス室と焼却炉は他のBLOCKから
少し距離を置くような位置にはあったが、
それでもこんな近距離で行われていたという事に驚いた。

たった70年前に今、目の前にあるここで、
人々の命が次々と失われていたとはとても思えなかった。



VI: Sister

博物館を出てすぐところに見覚えのある人影があった。

真っ白な麻の布に真っ青の3本ラインのサリー。

マザーテレサの施設で活動しているシスター達だった。

思わず駆け寄り、去年訪れた事を必死に伝えた。

皆、満面の笑みで私を迎えてくれ、ロケットやロザリオを下さった。

1つ1つkissをして、お祈りをしてから渡してくれるのだ。

この様にして物を下さる意味は、

宗教や文化や言葉などのニュアンスの違いで表現する事は難しいが、
とても有難い事であると、自然と感じ取る事が出来る。



まさかこんなところで
また会えるとは思ってもみなかった。
巡り合わせって凄い！
やっぱり全部繋がっているんだ。
こんな思いもしない出来事は本当に突然訪れる。

VII: Birkenau



Sister達と別れ、アウシュビッツ強制収容所博物館から
シャトルバスに揺られること約10分、
ビルゲナウ強制収容所に到着した。

永遠と広がる開けた土地。
目閉じて耳を澄ませば風や生き物の鳴き声が聞こえた。

場所さえ知らなければ、天気は快晴、緑も多く、
とても美しい場所だった。

場中に入る前に線路の上を歩いた。

その先に繋がる駅はなく、ただ、ゲートの方に向かって
線路が一本真っ直ぐに伸びている。



線路の先のレンガ造りのゲートを開くと、
アウシュビッツの数倍はあろう広大な土地が広がっていた。

中央の道を挟んで周囲には
収容所が規則正しく並んでいる。



中に入り中央の道をしばらく真っ直ぐ進むと、
不思議な形をした石が積み重ねられている
「国際慰霊碑」があった。

現在も花が絶えないそうで、
私が訪れた時にも沢山の花が手向けられていた。



周辺には沢山の碑文があり、
1つ1つ異なる言語で文章が綴られていた。

その数は約20ヶ国にも及ぶ。





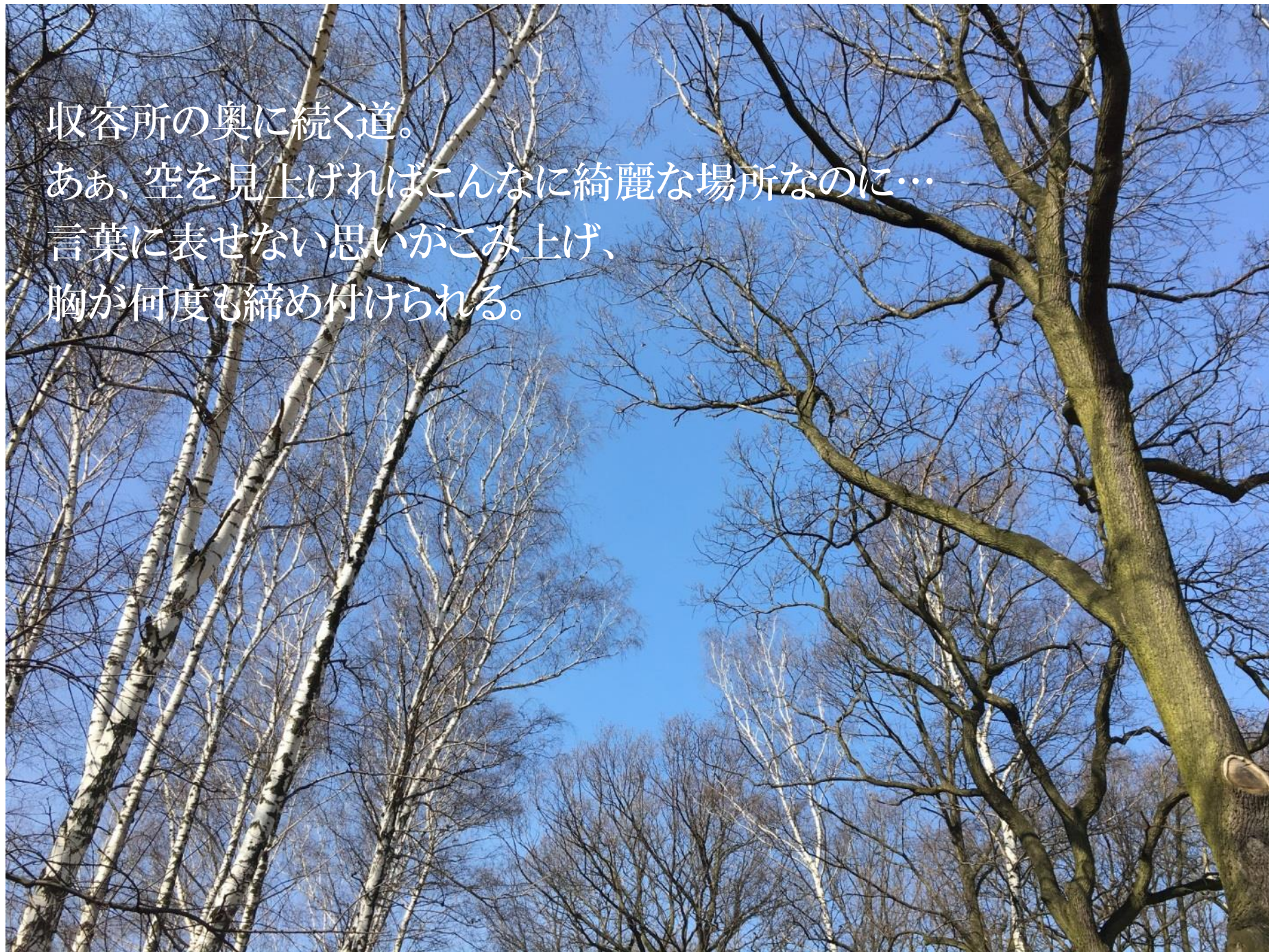
この地が永遠に絶望の叫びと人類に対する警告であるように。
ここではナチスが、150万人の男、女及び子どもを殺害した。
それは主に、ヨーロッパの様々な国のユダヤ人であった。

アウシュビッツ — ビルゲナウ
1940 - 1945

石碑の先にも道がしばらく続いており、
当時の建造物がそのままの形、
もしくは破壊された形で残っていた。



収容所の奥に続く道。
ああ、空を見上げればこんなに綺麗な場所なのに…
言葉に表せない思いがこみ上げ、
胸が何度も締め付けられる。



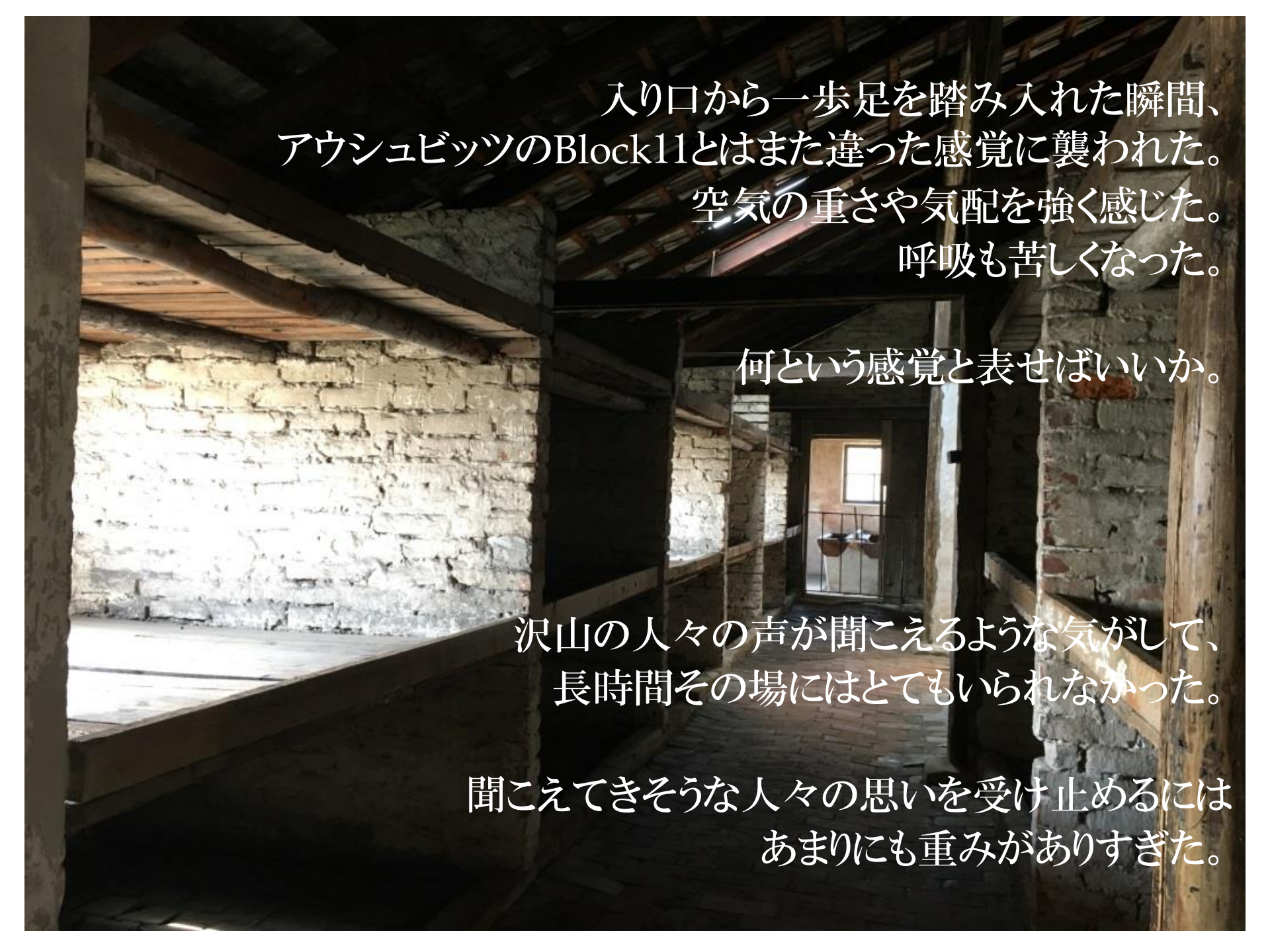


VIII : Block16

敷地内を隅々まで1人で黙々と歩き、
帰りの順路の途中で最後に1か所収容所に入った。



Block
16a



入り口から一步足を踏み入れた瞬間、
アウシュビッツのBlock11とはまた違った感覚に襲われた。
空気の重さや気配を強く感じた。
呼吸も苦しくなった。

何という感覚と表せばいいか。

沢山の人々の声が聞こえるような気がして、
長時間その場にはとてもいられなかった。

聞こえてきそうな人々の思いを受け止めるには
あまりにも重みがありました。

今こうして写真を見返すだけでも胸の奥が
ずっしりと重く感じる。



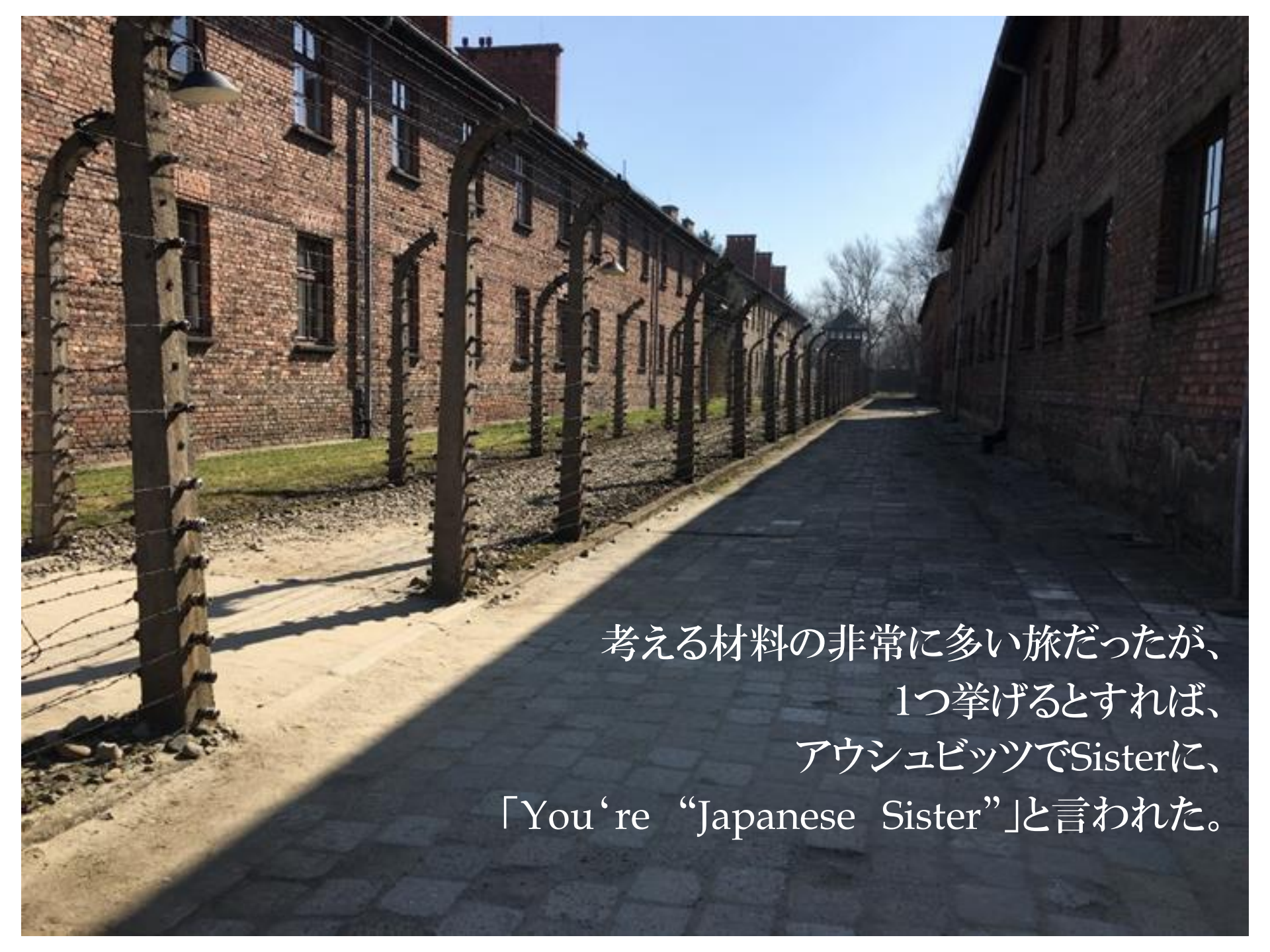
IX : In summary

今回もやはり帰国後は自分は何を得たのかよく分からず、しばらくの間は国外と日本の時間の流れにただ違和感を感じながら過ごしていた。

行っただけで終わらせない。

旅行ではなく旅としてあえて自分の中で区別をつけたからにはでは何かを得られたのか？と考えてしまう。

そうして自問自答を繰り返して約1ヵ月待って出た現時点での答え。



考える材料の非常に多い旅だったが、
1つ挙げるとすれば、
アウシュビッツでSisterに、
「You're “Japanese Sister”」と言われた。

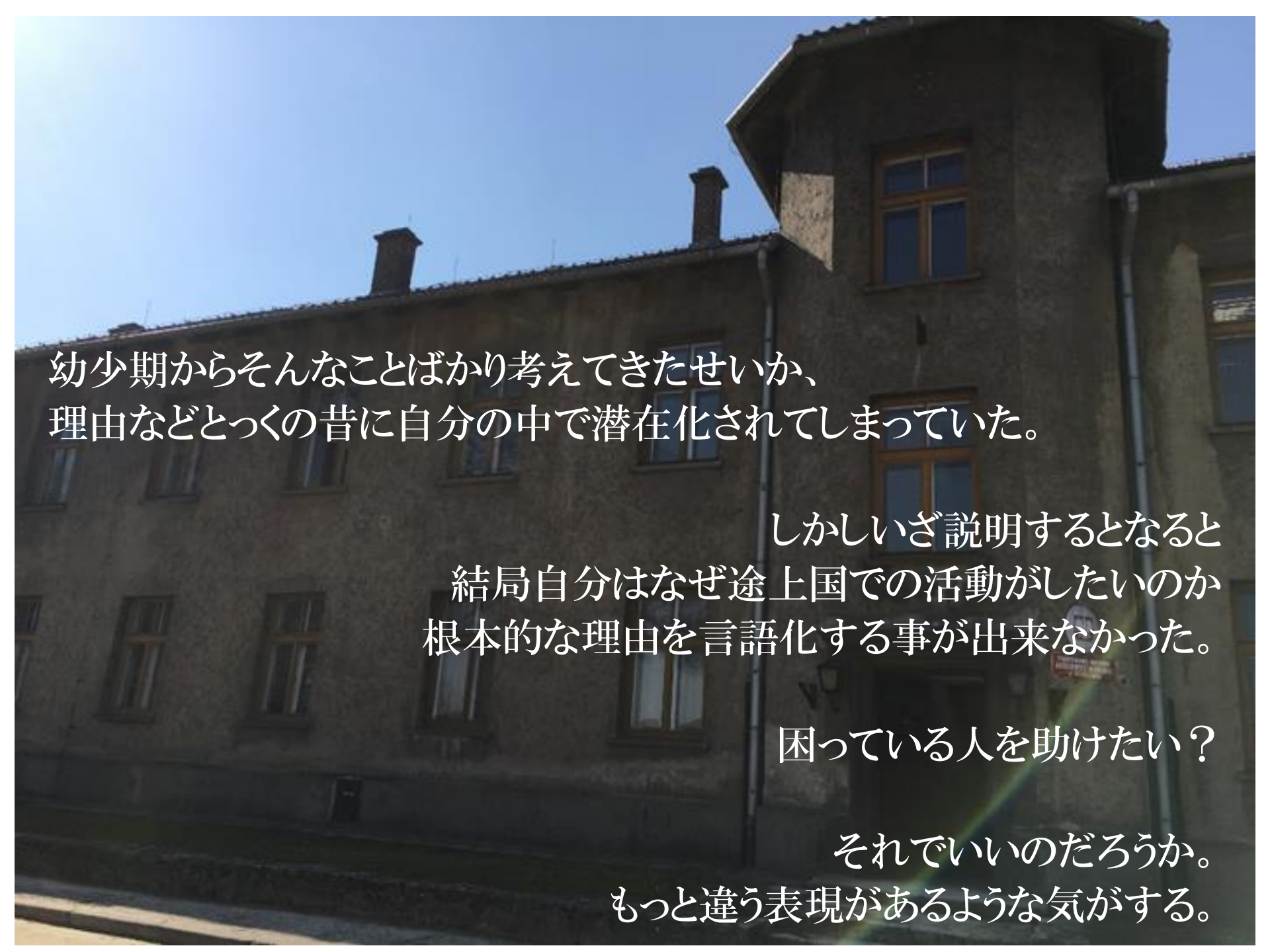
何をするにしても、どこにしようとも何でも出来る。
大抵の細かな事情は何とでもなるものだ。

インドに行かなくても
恵まれない人々に手を差し伸べることは出来る。
青年海外協力隊に所属しなくても国内ですべき事はいくらでもある。

そうじゃないの？
それでもあなたが行きたいと思う理由は何？

どんな意図でそんな言葉をかけて下さったかは分からないし、
私の勝手な解釈ではあるが、
そんな意味が含まれているような気がした。

今考えると、彼女たちなら私の奥底のモヤモヤした部分等
一瞬で見破れるような気もする。



幼少期からそんなことばかり考えてきたせい、
理由などつくの昔に自分の中で潜在化されてしまっていた。

しかしざ説明するとなると
結局自分はなぜ途上国での活動がしたいのか
根本的な理由を言語化する事が出来なかった。

困っている人を助けたい？

それでいいのだろうか。
もっと違う表現があるような気がする。

だが、まだまだ未熟ではあるがこれまでの人生と、
インドと今回の旅での経験を含めて考えると、
私の考えの基盤は“自然”であって、
その自然本来の摂理に反する事に抵抗感があるのだろう
という結論が出た。

環境破壊や生命の強制収容、
生命への過介入等も含まれるかもしれない。

そしてそれらの影響を受けている対象が
“人”ではなく“生命”とここであえて区別して表現することも
個人的には重要であると思っているし、強調したい。

だからこそ、その自然本来の摂理に
反する事を防ぐ力になれるのであれば
最も必要とされているところへ行きたいと思う様になったし、

生命の本来持つ自然治癒力を
重視した医療に関わりたいと思う様になったし、

最低限の設備の環境においても、
自然とともに一生を全うする生命に美しさを感じるし、
惹かれるのだと思う。

その答えが途上国での活動なのかも知れない。

では具体的に今後私は何ができるのだろうか。
何をすべきなのだろうか。

1人議論はまだまだ続く…。

また模索を繰り返す日々を過ごす事になりそうだ。

結局そんな繰り返しが好きなのだろう。
それを楽しんでいる自分もいる。

X : Afterword



トータルでたった10日弱。

ですが自分にとっての基盤を再確認できた貴重な旅となりました。
今回で明確になった自分の基盤を元に、
人としてというよりも、生命として自分は何をすべきか、
模索する事を続けたいと思います。

私にとってその時思った事、
感じた事をこうして文字として残す事で、
点と点が線となり、深みを増してゆく様に思えます。
未熟な文章力ではありますが、
この様な形で記憶を残せる機会を与えて頂いていることで
乱れた脳内を整理することが出来ているように思えます。

その工程は決して簡単ではありませんが、
線をつなげてゆく作業、その工程があつてこそ
さらに自分の糧として蓄積出来ていると思います。

このような機会を下さったことに感謝申し上げます。

ありがとうございました。

～ End ～